

「白川文字学を活用した校長講話」

最優秀賞



福井県 勝山市立荒土小学校
校長 道関 直哉

福井県出身である白川静先生のお名前を冠した荣誉ある賞を頂きますこと、身の引き締まる思いです。ご評価いただきました各位には心から御礼申し上げます。

全国には多くの方が自身の活動に白川文字学を活用して漢字文化を継承する活動に取り組んでおられます。私も小学校校長の立場からこの一員に加わりたくと考え、小学校の全校集会をはじめとした講話の機会に、漢字の成り立ちに関連づけて子ども達へメッセージを送ってきました。

今後も白川文字学をはじめとした福井ゆかりの文化を教材として、子ども達がふるさとに誇りと愛着を深められるよう研鑽して参ります。

1 実践の概要

平成 29 年度より小学校の校長として、『白川静博士に学ぶ楽しい漢字学習』『白川静博士の漢字の世界へ』（福井県教育委員会発行）をもとに、全校集会の校長講話や卒業文集の巻頭言などに漢字の成り立ちを活用してきた。漢字への関心を高めると共に、講話の内容が児童の印象に残るよう工夫している。これまでに 50 字程度の漢字を使って講話を実施しており、近年は教育雑誌等へ実際の講話を投稿するなど活動の幅を広げている。



2 実践の内容

(1) 「楽」 楽しい学校をつくろう

平成 29 年度始業式には、楽しい学校にしようと思ひかけるために「楽」の文字を使った。「楽」は、神を楽しませる持ち手のある鈴の形が起源となっている。式では古代文字を見せ、何の形からどんな文字ができたのかを考えさせた後、実物の鈴を鳴らして見せ、楽しい学校にするために、「健康の鈴」、「仲良しの鈴」、「勉強の鈴」を鳴らそうと呼びかけた。

式の後、校長室の前に「学校で楽しいことがあった人はこの鈴を鳴らすように」という掲示をし、鈴を置いたところ、休み時間に多くの児童が鈴を鳴らし、何が楽しかったのかを話してくれた。

(2) 「登」 努力の積み重ねは、大人への道を登ること

令和元年度の始業式に当たっては「登」の文字を使った。下の部分の「豆」は食べる豆ではなく高い脚のついた入れ物であり、上の部分は二つの足跡を表すことから、高いところに両足を置くことを表す「登」のもつ意味を伝えた。これに関連させて、日々の生活においては、努力を重ね一つ高みに上がることが、大人への道を登ることであることを話した。

これを受けスポーツ少年団や市・町主催行事へ児童が参加した実績を「努力の足あと」としてスタンプカードにまとめ、所定の回数を超えた児童を表彰することとした。

3 実践の成果

高学年は国語科での学習成果もあり、漢字の成り立ちについて多くの児童が理解を深めている。また、漢字未習の 1 年生にとっても、漢字への興味をもたせるきっかけになっている。回数を重ねることにより、児童だけでなく教職員も興味をもって聞いてくれるようになっている。